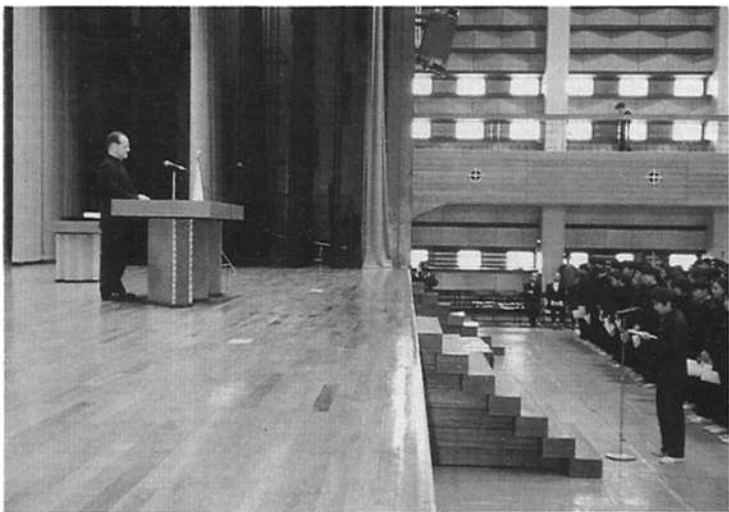


希望の旅立ち、三十九期生



今年度の卒業式はとんだ幕開けとなった。この日二月十日は未明から雪が降り続き、京都市内では11センチの積雪を観測した。これにより大雪警報が発令され、また、雪のために交通機関が混乱し、高三の生徒はほとんどが出席したものの、高一、高二の生徒に関しては、出席率が半分程度であった。卒業式も9時30分の開始が少々遅れて、9時47分に卒業生の入場となった。

まず、式に先だって、ベネディクションがおこなわれ、そして卒業式が始まった。君が代の後、学校長式辞に移った。式辞の中で、ラバディ校長は「後ろでなく前を見て、小さな一歩でもよいから前に進んでほしい。将来、どのような苦勞と戦わなくてはならないのか分からないので、持っている力を最大限発揮してほしい。」と激励の言葉を述べ、また、雪のために交通機関が混乱し、高三の生徒はほとんどが出席したものの、高一、高二の生徒に関しては、出席率が半分程度であった。卒業式も9時30分の開始が少々遅れて、9時47分に卒業生の入場となった。

後輩という宝物を大切にしたい

卒業生総代
田中寿幸君

引つ張ってこれた。私もよいから前に進んでほしい。将来、どのような苦勞と戦わなくてはならないのか分からないので、持っている力を最大限発揮してほしい。」と激励の言葉を述べ、また、雪のために交通機関が混乱し、高三の生徒はほとんどが出席したものの、高一、高二の生徒に関しては、出席率が半分程度であった。卒業式も9時30分の開始が少々遅れて、9時47分に卒業生の入場となった。

卒業生に贈る

A組
高田三夫

「不易流行」

これは蕉風俳諧の基本原理の一つで、「不易」は永遠に変わらない、昔から今に続く芸術の精神、「流行」は時代にに応じて変化するもの。この矛盾する二つの根源は実は同じで、この相反する二面を備えてはじめて真の芸術として完成するとされる。

時代の変化に、学校という有機体は対応できないのか。それを拒絶したままではなれば存続しないのか。わずかな期間の担任、教科担当者の反応は鈍かった。ある。答えはやがて諸君が見えてくれるはずだ。「不易流行の事は万事にわたるなり」健闘を祈る。

B組
田村岩男

39期の皆さん、卒業おめでとございます。新しい生活へ向けて希望と不安が同居する毎日でしょう。諸君の飛躍を期待します。

C組
赤澤和夫

卒業生に送る

使い古された言葉ではあるが、行く河の流れが君達であるならば、私達はその岸の柳に一時の影を映す。岸の柳でも時を過ぎれば、やがて河は水を増し、ゆるやかに成長しながら大海へたどり着く。ただ私は、小さな水の一滴一滴が、次々と目の前を通り過ぎてゆくのを確かながら、我が影の水の流れに沿え得ない。

D組
田中成彦

送る日に

つい先日までの日常的存在であった君に、非日常的な送別の感慨を述べることが、構えてもむづかしく、軽い言い方はなおさらむづかしい。こういう時に短歌は割と便利な詩型である。はれの日に服を着て来し君の未来をもつとも深く祈らむ。(20期生に)

E組
藤田武久

三十九期生の諸君、御卒業おめでとうございます。

卒業式当日は大雪となり、登校すること自体が大変だったことではあるが、すばらしい式であった事に加えてこの雪が卒業式の事を強く印象付けてくれたように思います。

F組
田中良平

一言を勧めて頂いた。

格言シリーズの続きと思いつたが、今回は旧約聖書の中からの知恵の書といわれる箴言から次の聖句を選びました。

御退官

中田先生
吉村先生

「雑文」

吉村輝一



私は、三十九年前、初めて京都に来た時、大小さまざまな神社・仏閣やいかに由緒ありきな建物が、ちよつとした小路の奥などに、さりげなく残されているのに驚かされた。九しはく終つて、九州の田舎育ちの私にとつて、古典の作品などではしか知らないことなかつた。都の奥の深さ、歴史の重みを感じに肌身に感じさせられることが増え、これから、長く住むかもしれない京都とどう付き合えばよいのか、ちよつと大袈裟に言えば、

「退官にあたって」

千葉多喜夫



衣笠山の麓、閑静な住宅地であった白梅町の周辺は年ごとに少しずつかわり、



え去るのみ」と言つて日本を去つた日本占領連合軍最高司令官がいました。が、私は、老後は語らず、ただ消え去るのみ」と今は言つておきましょう。

「これから遊々自適? 中田淳二

え去るのみ」と言つて日本を去つた日本占領連合軍最高司令官がいました。が、私は、老後は語らず、ただ消え去るのみ」と今は言つておきましょう。

笠

沖繩県の米軍基地問題で、太田知事が沖繩から米軍の基地をなくすように努力している。一方で、日本政府はこのまま沖繩に基地を置いておくという方針で、沖繩県と対立している。このどちらの方針に民意が反映されているのか。どうも沖繩県の方針に民意が反映されているのは明らかである。▼また、去年、広島・長崎両市長が国際司法裁判所で原子爆弾の違法性について答弁したときも同様であった。両市長が熱弁をふるい、原爆の恐ろしさや国際法に対する違法性を断言的に語り、傍聴者の中には涙する人もいた。しかし、それに対して政府の代表者は原爆の使用は国際法に違反するとは言えないとして従来からの政府の見解と同じ発言を繰り返した。このことからも大多数の日本国民の意見と政府の方針とが一致するとは必ずしも言えない。▼として日本政府は五十年前に戦争によって被害にあい、現在も苦しんでいる沖繩県民と被爆者の気持ちをくみ取ることが出来ないのだろうか。きつと加害国との外交関係を考慮するあまりにこのようになつたのだろうか。▼日本の外交面での、事をあら立てず、穏便に処理しようとする事無かれ主義は今までは効果を上げて来た。だが、今回のように日本の国民の利害に直接関わってくるような事にも、事なかれ主義で対応していいこととするならば、大きな政治不信が起るだろう。▼現在、内政でも住居の処理や薬害エイズ問題によって政府は国民の不信をかっている。この様に国民に政治不信がわき上っている今、日本政府は沖繩県民と被爆者に彼らが納得のいく方針を示さなければならぬ。それは、核兵器廃絶と沖繩の米軍基地の撤退への明確な意志である。

